



離島医療はおもしろい

隠岐広域連合立隠岐島前病院 院長 (徳島 15 期) 白石吉彦

「海がいいか？山がいいか？島根は両方あるよ」の問いに「徳島では山に行ったので、海がいいです」と返答し、「厳しいけど1年頑張ってきてくれ」と送り出されたのが、16年前になります。島根県の自治医大卒業生と結婚し、私の義務年限を私が6年、妻が4年で計10年。次は妻の義務年限を果たしにやってきたのでした。私たちの赴任した西ノ島は隠岐諸島にあり、島根半島の沖約50kmに浮かび、本土からフェリーで約2時間半です。

16年前の1998年に私は島前診療所（19床、現隠岐島前病院、以下当院）、妻は同じ島にある浦郷診療所（無床）に赴任しました。島前診療所には60歳と少しの診療所長、大学派遣の外科医、小児科医と私という体制でした。隠岐といえば後醍醐天皇、後鳥羽上皇が流された流刑の地という悠久の歴史があり、人は親切で自然は豊か、当然ながら魚介類は美味で、仕事も充実していました。定年前の診療所長（漁船を持っており魚釣り名人でした）の影響もあり、1年目に小さなヨットを購入（妻は自治医大ヨット部）。海を満喫していました。船も買ったことだし、1年といわず、もう少しここでいたいと思い延長を希望。1年1年と延長を重ね、3年した時に24床増床となり診療所から病院となりました。同時に診療所長が定年。次はお前が院長をやれというので、34歳の時に院長になりました。



全く想定外の展開で、その当時看護師は全員年上。人材管理も経営指標の見方もまったく無知。それでも自分より上の学年の者は誰も送れないと言われ、しぶしぶ承諾。それからは目の前の困った小石を拾い続ける日々でした。どうしようもないときには町や県、大学などをお願いして何とか現在に至っています。それでも、まず行ったことは近くの診療所との連携役割分担です。医師以外のスタッフは地元採用で、唯一の病院ですから皆顔見知りで、気持ちのこもった医療を行い、医師のみが数か月から1年交代で変わっていました。医師が長居したくなるような環境を整えば、この地域の医療は必ず更によくなると確信していました。そこで、当院と浦郷診療所、船で15分の隣の島にある知夫診療所の間では地域医療支援医師ブロック制をとり、6名の医師が3つの医療機関で勤務する体制をつくりました。2008年に電子カルテの導入を行いました。島前の4つの医療機関で共用利用を開始し、画像情報も同様の運用がなされ、相談、カンファレンスなどが気軽に行える環境となりました。当院と診療所間、隠岐病院県立中央病院、島根大学、医師会などとテレビ会議を設置し、合同カンファレンスや研修会の聴講、皮膚科の診療支援などに利用しています。

2005年には大学派遣の小児科医が撤退。その後は小児科専門医を持つ妻を中心に内科系総合医全員で小児を診る体制としました。2010年には大学派遣の腹部外科医が撤退しました。腹部外科手術はできなくなりましたが、救急車はすべて受け入れ（島だから当然ですが）、日常診療の処置系外来である外科外来は継続しています。臨床経験が比較的長く、診療所経験のある私と妻が交互に外科外来を行うことに

しました。外科外来といっても半数は整形外科（ほんとは整形内科？）、皮膚科、耳鼻科、眼科といった処置系外来です。もともと当院は眼科、精神科、整形外科、産婦人科、耳鼻科がパート診療で週に1回から月に1回あるため、それぞれの専門外来ブースが備えられています。耳鼻科外来には双眼の顕微鏡があり、処置具もあり、産婦人科には内診台、コルポスコピー、眼科には細隙灯、オートレフ、自動視野計とそろっています。しかも常勤医不在なので、機械系は使い放題です(笑)。総合医にはたまらないセッティングです。わからないことであわてないことはパート医がきたときに指導してもらうことも可能です。

数年たった時に専門医への受診が困難だからこそ処置系外来のニーズ調査ができると思い、調べてみることにしました。2012年度1年間の当院外科外来受診者3,700人の内訳を分類し、2013年に月刊地域医学に「小規模離島における内科系総合医による外科外来の試み〜へき地小病院外科外来の疾患頻度と必要な技能〜」として投稿させていただきました。またこのデータをもとに、ちょっとした小技、物がない中での創意工夫などを「離島発いますぐ使える！とって^{おき}隠岐の外来診療小ワザ離れワザ」（「とって^{おき}隠岐の」は妻チョイスです(笑)）として夫婦共著で中山書店より2014年5月に上梓させていただきました。こうしたものがきっかけで、少しでもへき地離島での外来診療が楽しいものになるといいと思っています。

小さな島で少子高齢化に伴う生産年齢人口の減少をひしひしと感じています。介護職や保育士の確保がままならず、社会福祉法人立の老人ホームの運営が立ち行かなくなりつつあります。保育士さんの確保が困難で、保育園も運営が厳しく、民間保育園で行っていた病後児保育を2014年から当院で病児・病後児保育という形で開始しました。病院で行うということで安心して利用され、順調に利用者数を伸ばしています。

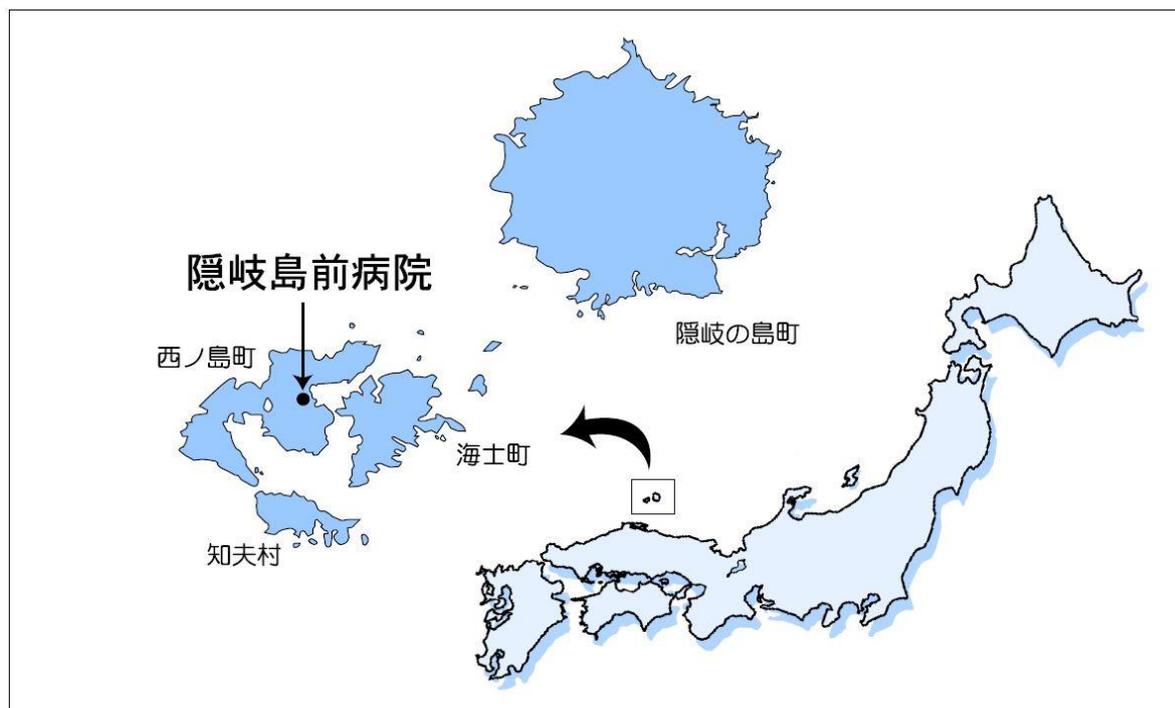
16年の間に子供の数も1人から4人に増えました。ヨットもフィンランド製の大きなヨットに乗り換え、世界最速の電気自動車テスラロードスターを乗りまわし、魚釣りをしたり、潜ったりと島ライフをエンジョイしています。

また、2013年には第2回日本医師会赤ひげ大賞を受賞いたしました。「地域の医療現場で長年にわたり、健康を中心に地域住民の生活を支えている医師にスポットを当てて顕彰すること」ということで、全国で5名の受賞という大変な賞で非常に光栄に思っています。この地域の医療を支えてくれる島根県、後方病院、そして病院スタッフ、住民、何より家族そして、公私ともにすばらしいパートナーである妻裕子に感謝しつつ筆をおきます。

追伸

現在「島はおもしろいで！」というweb漫画が公開されています。

<http://www.e-doctor.ne.jp/contents/special/shimane/>



隠岐：島前と島後にわかれ、島後は隠岐病院（115床）があり、人口約15,000人。島後には飛行場があり、伊丹空港と出雲空港に日に1便程度運行されています。島前島後間はフェリーで約1時間、日に2-3便。島前は1島1町村の海士町中ノ島、西ノ島町西ノ島、知夫村知夫里島の3島で構成されます。人口は合わせて約6,000人、高齢化率は42%となっています。島前に開業医はなく、それぞれの島にある3つの国保診療所、西ノ島にある隠岐広域連合立隠岐島前病院（44床 一般20床、療養24床）の4つの医療機関があります。島前の島は島前町村組合の管理する内航船といわれる船で5～15分で行き来が可能です。

！！地域医療オープン・ラボNews Letter原稿募集！！

地域医療オープン・ラボでは、自治医大の教員や卒業生の研究活動を学内外へ発信するために、「自治医科大学地域医療オープン・ラボNews Letter」を定期的に発行しています。

<http://www.jichi.ac.jp/openlab/newsletter/newsletter.html>

- ☆ 自治医大の教員や卒業生の研究活動をご紹介ください
- ☆ 自薦・他薦を問いません
- ☆ 連絡先：地域医療オープン・ラボ openlabo@jichi.ac.jp